

競争と排除を
乗り越える
教育と福祉実践

全国こども福祉センター
理事長
保育士、社会福祉士

荒井 和樹

能力社会から

共同体自治へ



はじめに／わたしたちは何に苦しんでいるんだろう。

2016年7月、相模原市にある障害者施設で45人が刃物で殺傷されました。
「いつまで生かしておくつもりなのでしょうか」

逮捕された加害者の元職員は、一貫して「障害者は不幸をつくる」「役に立たない人間、生産性の低い人間は死ねばいい」と主張します。まさにど真ん中の優生思想です。事件の動機についても「障害者はいなくなればいい」と、障害者の存在そのものを否定する供述をしていました。

それを「時代の言葉」だと牧師の奥田知志は語り、加害者オリジナルの言葉ではないことを強調しました。元職員の「役に立たない人間は死ねばいい」という発言は、社会の価値観そのものを表していると指摘したのです。

現代社会は、効率や生産性、コストパフォーマンスが強く求められます。教育や福祉の分野においても例外ではありません。

本来、教育職や福祉職は率先して、人々の権利を守る立場にあります。命の大切さを伝え、人権教育の担い手としての役割を担っています。こうした仕事は非営利のはずなので、「生産性、コストパフォーマンスとは無縁であり、一切関係ない」と言い切りたいところです。

ところが、わたしの周囲では真逆のことが起きているのです。

教育や保育、福祉の現場の多くでは、就学や就労などが目標として設定され、本人の能力を高めるための「訓練」や「支援」が日常的に行われています。そして、その結果としての「成果」が、職員に対してはもちろん、教育や福祉の対象である子どもや障害者などに対しても求められています。

「あるがままで。そのままのあなたでいい」と言いつつも、子どもや障害者本人に問題を帰属させ、適応や発達が追求されます。そこでは、自立に向けた支援は無条件に正しいとされ、本人の“あるがまま”や“そのまま”は容易に否定されるという矛盾があります。

わたしたちは、能力によって比較したり、評価したりすることに、慣れすぎています。能力に基づいて人を評価し、選別する考え方を「能力主義」と呼びます。能力主義は、日本の社会に強く影響し、学歴社会や受験競争を生んでいます。その能力主義の底流を流れる優生思想は、知らず知らずのうちにわたしたちの生活に染みついています。

わたしが活動している保育、福祉分野においても、個人の「能力」を高めることが盛んに強調されています。〇〇塾や〇〇支援、〇〇訓練……。その多くが「発達」や「自立」を目的としているものです。まるで個人の能力を高めることが幸福につながる、と誰もが信じて疑わないようにも思えます。

過剰に能力を重視する社会でプレッシャーを感じている子どもは少なくありません。

2022年1月15日朝、東京大学前で刺傷事件が発生しました。その日は、大学入学共通テスト初日で、わたしは自分の勤める大学の試験会場で監督業務を担当していました。加害者は東京大学医学部を志望する高校生で、「東大や医学部に執着する一方で、成績不振に悩み、自らを追い詰めていった」と報道されています。

「高校生の心と体の健康に関する意識調査—日本・米国・中国・韓国の比較—」によれば「自分は価値のある人間だと思うか」という質問に、日本以外の3か国はいずれも8割超がYESでしたが、日本は最低の44.9%

でした。5割を超える子どもが、無価値観という生きづらさを背負ったまま、大人になっていくのです。わたしも、無価値観や能力主義に縛られてきた経験を持つ一人です。

過剰に能力を求める社会は、一見自由なようで窮屈です。わたしが勤めてきた大学でも、保育士や社会福祉士などの資格を取得しないと「大学に来ている意味がない」と、自分を追い詰めてしまう学生が数多く存在します。

さらに近年では「学力に加えて、コミュニケーション能力や人間力が重要だ」と言われるようになりました。人間力とは「自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義されていますが、とてもあいまいで、抽象的な概念です。日本社会は子どもや若者に学力やコミュニケーション能力、人間力など、さまざまな能力を求める傾向が進んでいます。

なぜ人々は、無価値観や能力主義に支配されてしまうのか。その問いに答えて、能力主義に苦しみ悩む人々を解放できないかと考え、わたしは本書を執筆しました。一人でも多くの「あるがままで。そのままのあなたでいい」を取り戻すことができれば幸いです。

2025年6月1日

全国こども福祉センター理事長 荒井 和樹

もくじ

はじめに／わたしたちは何に苦しんでいるんだろう。 2

第1章 能力主義にむしばまれる児童福祉

1 全国こども福祉センターとは？	12
「支援」ではなく「交流」	12
2012年設立から現在までの歩み	16
2 能力不安と承認でゆれる子どもたち	18
自分を認めてくれる場所を探す少女たち	18
不登校の少女が抱える能力不安	20
能力主義に翻弄される施設の子どもたち	22
3 施設職員も能力主義に翻弄されている	26
児童の「評価」と自立支援計画	26
指導や訓練を目的とした施設	28
進学しない児童は社会の敗者なのか？	29
4 能力主義は保育現場にも	32
訓練される子ども	32
能力主義に拍車をかける職員配置基準	34

5 成果主義に翻弄されるNPO	35
家賃や職員給与の財源問題	35
NPO業界に跋扈する支援ビジネス	37
助成金争奪戦のリアル	38
助成事業の採択後も続く不安	41
競争で勝つために	42
財源に悩む多くのNPOや市民団体	44
寄付者と直接つながれないNPO	46
助成を受ければ成果主義に取り込まれる	48

4 業務の効率化で見えなくなるもの	67
メンバーからは見えない運営業務	67
資金の出し手（OB・OG）と受け手（メンバー）の軋轢	69
それぞれの参加動機や目的	71
5 自身のなかにある能力主義に気づく	72
助成金の取得をやめてできた余裕	72
任せることで見えてきた能力社会	73
専門職としての反省	75

6 仲間とともに能力主義を乗り越える	78
悩みを抱えずに共有する	78
仲間と一緒に助成金依存から抜け出す	80
慈善型NPOへ移行する試み	82
「ちがひ」を受け入れて尊重する	86
能力重視の考えから距離を置く	90

第2章 わたし自身、かつて能力主義に陥った。

1 「なんとなく」「楽しいから」参加する子ども・若者	52
専門家の協力なしに活動を開始	52
資金獲得競争へ参入	53
NPOが助成金を取得する3つの理由	54
2 成果主義の導入へ	56
社会から求められる自立支援	56
メンバー個々人も評価の対象に	57
事務所の確保で生じた新たな問題	59
3 不公平感が助長する能力主義	60
事務所に遊びに来るメンバーたち	60
憤るパートナー	61
メンバー内で生じる摩擦と分断	63
追い詰められるメンバー	65

第3章 出会いと交流から生まれる多様性

1 小学生から不登校だったKさん	94
友だちが一人しかいない	94
考えや気持ちを言葉にできなくても	96
満面の笑みがメンバーを支える	98
2 路上生活者のOさん	100
避けていたメンバーたちもそのうちに	100
声かけの対象やメンバー同士の交流に大きな偏り	103
異質性を排除せず尊重できるか	105
「児童福祉」や「子どもの支援」に縛られない活動へ	107

3 誰からも覚えられていないHさん	108
彼はわたしたちのことを覚えている	108
若年女性支援で活躍する女性ボランティア	108
能力を求めるようになった背景	110
冷遇される男性ボランティア	112
Hさんと中高生メンバーの出会い	113
参加メンバーが増えて再び孤立	114
コモンズであることに気づいたHさん	116
4 言葉をほとんど発しないRさん	120
広場の椅子に何時間も座ったまま無反応	120
雨の日のトランプ	121
言葉にならないものを拾うには	123
5 高校卒業後、無職のMさん	125
活動準備を通じて人間関係に変化	125
ケア労働に適正な評価を	127
6 虐待され夜をさまよっていたCさん	129
既存の支援のハードルが高すぎる	129
他人の家で気遣うより過酷な車中泊のほうがマシ	132
支援者のパワーに感じる圧力やしんどさ	134
7 出会いと包摂を積み重ねてわかること	138
「ただそこに居るだけでいい」という価値	138
異質性が高まると比較しようがない——それこそが多様性	141

第4章 能力主義をどう乗り越えるか

1 能力主義脱却へのプロセス	144
「共同体」を変えてゆく	144
能力主義脱却に向けた3つの段階	146
2 能力社会からの価値の転換	147
能力社会／脱能力社会を考える4つの視点	147
1. どこに目的を置くか	148
2. どのような能力観を持つか	152
3. 何を価値基準に人間関係を結ぶのか	156
4. 存在を証明するための価値	161
実践ポイント① 共生の理念	165
共生の理念の重要性	165
1. 弱いままでも尊厳が守られること	166
2. 共有の財産とコモンセンス	171
3. 信頼と愛情でつながる共同体へ	175
実践ポイント② 倫理・行動基準	183
1. 損得の考えから距離を置く	183
2. 与益者と受益者の区別をつけない	187
3. 無条件に受容する	191
4. 差異を解消しない	196
実践ポイント③ 能動的権利の保障とオーナーシップ	201
1. 権利の主体として行使する	201
2. 多様な表現を保障する	204
3. 自由や裁量を保障する	207
4. 共同体の主権者でありオーナーであるという意識を持つ	211

実践ポイント④ 共同体の規模と経済的基盤	216
1. 共同体の適正サイズを意識する	216
2. 労働や生産関係を見渡せるものにする	220
3. 寄付が支える慈善型NPO	224
おわりに	228

第 1 章

能力主義に
むしばまれる
児童福祉

1 全国こども福祉センターとは？

「支援」ではなく「交流」

本書は、わたしが設立し主宰しているNPO法人全国こども福祉センターでの経験をもとに、能力主義にゆがめられている現在の児童福祉やNPO法人、ボランティア活動の問題点を指摘し、能力主義から脱するヒントを提示しています。そこで、まず全国こども福祉センターがどのような活動をしている団体であるかを簡単に紹介しておきましょう。

全国こども福祉センターは、2012年に児童養護施設職員の経験を持つわたしが、声かけ（アウトリーチ）を通じて、10代・20代前半のメンバーとともに設立した団体です。2013年に法人格を取得して特定非営利活動法人となり、これまで2万6千人以上の子ども・若者に社会参加の機会や一時避難所の提供、緊急支援を行ってきました。年間2千人以上が集う街角の交流拠点として、また、ボランティアセンターとしての役割を担いながら、声をかけられた子ども・若者が声をかける側に回るという循環を13年間続けています。

アウトリーチとは、「(外に)手をのばす」という意味がありますが、日本の社会福祉分野では、主に「訪問支援」を指します。支援を必要とする高齢者や精神障害者、不登校やひきこもり状態にある子どもなど、対象者の家庭を訪問する活動として発展してきました。そのため、アウトリーチを「家庭訪問」や「出張型支援」ととらえている人も少なくありません。

日本で実践されているアウトリーチの多くは、指導、訓練など自立支援を目的とするものです。支援対象者とされる人たちに、就労や進学、

自立を促したり、変化を求めたりするものを中心となっています。学校への登校や病院、相談所の利用を誘導したり、自宅に訪問しながら対象者を監視したりするような活動も見受けられます。支援と引き換えに、専門家に管理・介入される環境に置かれるため、支援を拒否する人も少なくありません。わたしは、子ども・若者と出会うなかで、対象者に一方的に変化を求めるアウトリーチや押しつけ支援のあり方に問題意識を持つようになりました。

一方、音楽や芸術分野のアウトリーチは、鑑賞を促すだけではなく、参加や交流、体験など、「相互理解」や「協創」を目的に双方向的な活動として発展してきた経緯があります。わたしは、街中やSNS上で声かけを通じて出会う子ども・若者はもちろん、一緒に活動するメンバーが何を求めているかよくわかりません。そのため全国こども福祉センターでは、たがいの理解を深めることに時間をかけます。ほとんどの援助機



声かけ活動は、親しみを持ってもらうため、また、しっかりと認知してもらうため、メンバーは着ぐるみを着ています。

関が「支援」を目的にアウトリーチを行っているのに対し、「支援」を目的にせず、「交流」するためにアウトリーチを行う全国こども福祉センターの活動は、類を見ない珍しい活動といえるでしょう。

全国こども福祉センターの活動は、声かけをきっかけに出会った子ども・若者をメンバーにして、名古屋駅西口や栄駅周辺などの繁華街に足を運び、声かけ活動と交流活動、相談活動、募金活動を行うことです。その場で、緊急支援や一時避難所の提供を行うこともあります。また、定期的にバドミントンやフットサルなどのスポーツ交流会を開いています。

大きな特徴は、声をかけられた若者が仲間になり、今度は声をかける側に回るという循環です。アウトリーチをしているのが子ども・若者たちなのです。結果的に、多くの子ども・若者が声かけ活動と交流活動に参加しています。交流の場でもあり、避難所でもある事務所の鍵も、子ども・若者メンバーが所持しており、自由に出入りできます。逆にいうと、児童福祉の専門家がアウトリーチをしているわけではありません。そ



のため、全国こども福祉センターの活動には「支援」というメニューはありません。そのため、支援する側・される側の区別はなく、全員が「参加者」です。ここには「利用者」と呼ばれる人もいません。

全国こども福祉センターには、喫煙や飲酒、家出などの不良行為や、援助交際などの非行、路上生活者、犯罪歴、精神疾患を抱えている若者も参加しています。ほかにも、少年院や児童養護施設出身者、無国籍の若者、障害者、中高年では非正規労働者や路上生活者など、多様な背景を抱える人がメンバーとして参加しています。彼ら彼女らは社会からは「要支援対象者」として扱われてきましたが、全国こども福祉センターでは、アウトリーチの実践者として主体的に活動し、交流活動ではケアの担い手として活躍しています。

東海圏でもっともアクセスが良い場所で活動しているため、さまざまな人間が交流し、支えあう場となっています。メンバー以外にも多くの若者が、学校帰りや買い物、デートや待ちあわせのついでに参加してく



れます。仲間と話したいとき、家族や学校の問題で相談したいとき、家出して行き先がないとき、誰かの役に立ちたいとき、何かボランティアしてみたいときなど、参加者の目的はバラバラです。だから、前述したとおり「街角の交流拠点として、また、ボランティアセンターとしての役割」をはたしているといえます。参加費は体育館などで行うスポーツ交流会や飲食を伴うイベントを除き無料です。

2012年設立から現在までの歩み

全国こども福祉センターという抽象的な法人名にしたのは、出身地域、性別、障害の種類や有無などの属性に縛られないようにするためです。多様な子ども・若者が活動に参加することを見越して、当事者活動で生じがちなスティグマを軽減したいと考え、公的機関のような堅い名前にしました。地域によっては、カジュアルな名称が毛嫌いされたり、NPO法人というだけで信用を得られにくかったりもします。また、非経歴のある若者や縁もゆかりのない移住者に対して差別や偏見も強く、当事者活動に対する視線も厳しいものがあり、再出発のハードルになると感じていたことも抽象的で堅い法人名にした理由の一つです。

2013年に法人格を取得し、特定非営利活動法人となったあと、翌年の子ども虐待防止世界会議名古屋2014では現地委員会を務め、世界会議開催に協力し、参加団体でもっとも多いユース21名を派遣しています。

2015年には、名古屋市社会福祉協議会地域福祉リーディングモデル事業に採択され、アウトリーチ（直接接触型）研修を開始。2016年には、東京支部と知多支部を発足。また、内閣府・日本財団連携基金によるこどもの未来応援基金助成事業に採択され、アウトリーチ国内普及プログラムを実施しました。2020年には、東三河支部を発足。名古屋市市中村区に

ある同朋大学との包括連携協定を締結。読売新聞東京本社主催の「あしたのまち・くらしづくり活動賞」の主催者賞を受賞しています。2022年には、名古屋市や愛知県警察から依頼を受け、子ども・若者実態調査業務を受託したり、警察と連携しシンポジウム開催に協力するなど、行政機関との連携も行っています。

2023年には名古屋市子ども・若者の居場所づくりモデル事業アウトリーチ業務を受託。名古屋駅以外の繁華街や公園にも活動場所を広げて、子ども・若者が児童買春や薬物乱用などさまざまな犯罪に巻き込まれる事件を未然に防ぐための活動を行っています。また、同年こども家庭庁から推薦を受け、「第1回未来をつくる こどもまんなかアワード」最高賞の内閣総理大臣表彰（こども・若者部門）を受賞。声をかけられた子ども・若者が声をかける側に回るという循環が評価されました。さらに2024年には、愛知県困難な問題を抱える女性支援事業実施団体に選定されています。



2023年「第1回未来をつくる こどもまんなかアワード」最高賞の内閣総理大臣表彰（こども・若者部門）を受賞

首相官邸で行われた表彰式で岸田文雄首相は、「こども若者一人ひとりに寄り添い、支えていくための力強い支援者だ」と評価し、「素晴らしい取り組みを全国に伝え、こどもまんなか社会の実現のための支援の輪を広げていきたい」と述べています。

こども家庭庁職員の家子直之さんからは、「こうした取り組みを社会により広く普及しなさいというメッセージなんだと受け取っています。こどもや若者は大人から支援される側の存在という一方通行ではなく、お互いにできることを持ち寄ってまた次の若者たちと出会うという循環が広がっていけば、自分らしく生きやすい人が今より多くなるのかもしれないと気づかされました」とお祝いの言葉をいただいています。

2 能力不安と承認でゆれる子どもたち

自分を認めてくれる場所を探す少女たち

全国こども福祉センターの活動には10代の男女がボランティアとして数多く参加します。多感な時期ですが、性別関係なくメンバーの誰とでも自由に交流することができます。それにもかかわらず、10代の少女の多くは一緒に参加した友だちや、ごく限られた気の合うメンバーとしか交流しません。自分より年下のメンバーや、同性のメンバーとは距離を置き、避けてしまうのです。学校でいじめられるなど、同年代の同性に苦手意識を持っている場合が少なくないからだと思います。彼女たちはボランティア活動に足を運んでくれるものの、声かけや募金活動には積極的に参加せず、とにかくお気に入りのメンバーと交流して帰宅し

ます。なお、お気に入りのメンバーと交流して帰宅する傾向は、10代に限らず年齢を問わず見受けられます。

※全国こども福祉センターでは、活動頻度が高く、継続的に参加し、グループラインに所属する仲間を「メンバー」と呼んでいます。10代・20代前半が8割を占めますが、一部中高年層も所属しています。一方、短期・単発の参加者を「ボランティア」と呼んでいます。「メンバー」もボランティアとして活動していますが、本書で記述する「メンバー」「ボランティア」とは、全国こども福祉センターへのかかわり度合いの違いによる名称です。なお、「メンバー」「ボランティア」をまとめて「参加者」と表現する場合もあります。

いつも一人で過ごしていたA子さんは、「やりたいことはない」「ブスだから死にたい」と言います。露出が多めの服装で参加し、女性を避け、年上の男性に甘える傾向があります。自分は無価値だといい、自殺未遂やパパ活を繰り返します。自分のことを人見知りだと言います。

B子さんも一人で行動しています。胸元が大きく開いた服装と短いスカート姿で活動に参加します。彼女は「精神を患い、入退院を繰り返して、18歳からは風俗店で働くようになった」とのこと。やはり、自分のことを人見知りだと言います。

短いスカート姿で活動に参加するC子さんは、パパ活を繰り返す少女です。「(男性に)誘われたらついていってしまう」「好きなわけではないけれど、うれしい」「お金をくれることは、自分を認めてくれている」と話します。大学受験を控えており、学力に強い不安を抱えています。

メンバーは彼女たちのことを心配しますが、3人のスタンスは変わり

ませんでした。彼女たちに共通しているのは、不登校や中退の経験があること。そして、同年代もしくは年下の女性を嫌い（年上の男性を好む）、自身の学力や容姿、コミュニケーション能力などに対して不安があるという点です。

彼女たちの語りから明らかなのは、学校社会と同世代・女性社会への不適応です。“居場所がない”という状態は、自分の存在や能力を他者から承認されず、自分には価値がないといった強い自己否定感から引き起こされます。能力を否定されることによる、強い不安感、孤独感でした。

学校は、基礎学力の習得や体力の向上、コミュニケーションなど、子どもにとって多くのことを学べる場所です。しかし、彼女たちはその学校社会で評価されず、同性の女性から排除された経験を持ちます。だから、同性のグループに馴染めないし、交流の機会が訪れても自分から適応しようとしません。3人とも“認めてくれる場所”を探しているだけで、特別なことを求めているわけではありません。人は誰も自分を、自分の能力を認めてくれる場所を求めるからです。

主に成人男性が性的な目的で少女たちに近づき、悩みを聞くなどして偽りの信頼関係を築いたあと、少女を操ろうとする（手なずける）行為をグルーミングといいます。グルーミングは社会問題として少しずつ認知されてきていますが、彼女たちのような存在にとって、あるがままの自分を認めてくれる人間が“成人男性だけ”という状況は見過ごされています。学校社会や女性社会で排除された少女たちの存在を認めない限り、グルーミングはなくならないでしょう。

不登校の少女が抱える能力不安

街中での声かけを通じ、小学校から不登校だというKさんと出会いま

した。

全国こども福祉センターのメンバー一人ひとりの特徴は、活動を通して徐々に見えてきます。例年、人見知りが多く、活発にコミュニケーションを図ろうとするメンバーは少ないものの、活動を繰り返すうちに、交流会やミーティングなどで少しずつ発言するようになります。ところが、Kさんは半年が経過しても、言語をほとんど使用せずにまわりと交流していました。身振りや手振り、表情やしぐさといった非言語でコミュニケーションを図っていたのです。そして、ミーティングでは終始険しい表情でした。

「わたしは難しい言葉がわからないから、ミーティングにいても何の役にも立てない。でも、みんなが優しいから参加している。わたしも何か役に立ちたい」と語ります。

Kさんは自分のことをモブキャラのような存在だと言います。モブキャラとは、名前のない群衆を意味します。彼女は、中学校を一日も登校せず卒業。高校には進学せず、中卒のまま無職となりました。中卒であることで周囲から馬鹿にされたり、ののしられたりしたこともありました。学校に行っていないから、友だちもいません。アルバイトもなかなか受からず、やっと皿洗いのアルバイトを見つけましたが、収入は低く、同僚からも冷たく扱われているようです。生活ができるほどの収入も得られませんでした。

「わたしは中卒で能力が低いし、普通の会社とかでは働けない。やりたいこともない。将来は、姉と同じキャバ嬢になると思う」と語ります。誤解のないように説明すると、彼女はキャバ嬢になりたいとは、一言も言っていない。まわりから差別され、冷遇されることによって、能力不安を抱えていたのです。